



無断転載不可©IPAMIA 2023

IPAMIA Oral History Project

Part4: 谷川まり Tanikawa Mari 1963年 2月17日生まれ

インタビュアー 山岡さ希子 (IPAMIAメンバー、アーティスト)

北山聖子 (IPAMIAメンバー、アーティスト)

インタビューをした日 2022年6月11日

場所 北山聖子の自宅 (神奈川県横浜市旭区)

<目次>

1. 生い立ち p.1
2. 上京～「セツ・モードセミナー」、「ピースボート」 p.8
3. 霜田誠二氏との出会い、「土湯温泉」、「公民館運動」 p.12
4. 「会津アートカレッジ」、1985年以降のイベント p.21
5. 《泥の子ジャミラ》 p.26
6. 《夢のパン工場》 p.31
7. NIPAF 海外公演、WPAO への参加 p.34
8. 2000年代の作品 p.40
9. 酵母、そして「アレキサンダー・テクニーク」 p.46

1. 生い立ち

山岡: 今日はよろしくお願いします。それでは、パフォーマンスを始めた経緯ということで、生まれ育ったお家の事とか子供の時どんなお子さんだったかなどを、お聞かせください。

谷川: 生まれは三重県の鈴鹿市という所で、すごい貧しい家に生まれたんだと思います。鈴鹿の記憶はあんまりないんだけど、父親と母親は三重県出身で、母親の家は農家でけっこう裕福な家。父親の出身は鳥羽っていう海の方で、父方の祖父は職人で祖母は2度目の奥さんで、なんていうかちょっと貧しい...裕福な家からしたら、ちょっとガラ悪いって感じだった。

山岡: お父さんは、どういうお仕事されてたんですか？

谷川: 父は新聞配達をしてました。母は両親から父のことを「不良っぽい人だから気を付けるように」と言われていて、父はよく思われていなかったみたいです。でも結局、2人は恋愛結婚をして、わたしが生まれた頃の写真をみるとすごく幸せそうで、1人目の子供で、かわいい、かわいって育てられました。遊園地とか色んなところに連れて行かれた写真がいっぱいあります。4歳の時に妹が生まれて、その次の年に弟が生まれました。

山岡: お父さんとお母さんは、何年生まれですか？

谷川: 母親も父親も昭和の14年ですね。家は貧しかったので、保育園はちょっと行ったけど幼稚園には行ってないかな。母親は、わたしが小学校の頃から働き始めたと思います。でも、父親と母親の関係が、なんていうのかな、歪んでるって感じていました。体が弱くてよく熱を出して寝込んでいてあまり学校に行っていなかったので、学校に行くと病気がた子、汚い、みたいな感じで、「えっぶ切った」「バリア張った」って、言われたりしました。そばに来るな、汚いものを遠ざけたい、みたいな感じだね。

山岡: 引越しは多かったんですか？

谷川: けっこう引っ越しが多かったかな？鈴鹿で生まれたけど、四日市に5歳ぐらいまでいて、6、7歳の時に山梨県に引っ越して。あとから聞いた話では、引っ越しをしたのは父親が新しい場所で新聞販売店をやる計画があったらしくて。結局その話はなくなったみたいなんだけど(笑)。それから山梨県の小学校に通って小学2年生で静岡にまた引っ越しました。当時の山梨県の子供ってやんちゃな子供が多くて、後ろからいきなり男の子に蹴っ飛ばされたりとかしましたね。

山岡: なんかあんまり楽しくなかったっていうか、キツかったというか。

谷川: うん、なじめなかった。友だちはいたけど、学校に行くと靴を隠されて裸足で帰ったりとか。靴はゴミ箱に入ってたんだけどね。家でも母親が厳しく躾ようとしてたり、近所の子と遊んでも泣かされて帰ってきたり。

北山: そうですか。

谷川: そういえば、わたし、5歳ぐらいから目をこういうふうにして片目をつぶって見るクセがついちゃったんですよね。それで、「なんかこの子おかしい」って感じになって父親がおじいちゃんのところにバイクで連れてって、「栄養失調じゃないのか？」言われたりしましたね。「横浜港湾借景行為表現計画」(横浜トリエンナーレ応援企画、2005年)のパフォーマンスで観客に渡したのは、その当時の写真なんです。

山岡: そうでしたね。その写真のこと、覚えています。

谷川: あと、小さい頃にあったことという、小学校1年か2年の頃に、盆踊りの練習でよく会う近所の優しいおじいさんがいたんですよね。当時 echo っていう箱のタバコあって、その箱でバックみたいな作ってくれて。

山岡: 小物入れみたいにして。そういうのを作る人いましたね。

谷川: そう、それがすごい好きだったんだけど、ある日そのおじいさんのとこに遊びに行くと、「お布団に入らない？」みたいな感じで。子供だから入っちゃったのかな？なんか気持ち悪いことされちゃったよな…記憶があつて。えー、なにが起こったんだろう？って思つて。それで、あのおじいちゃん、ちょっと怖いつてなつて。

北山: 小さい時なら、わからないし、お布団入っちゃいますよね。

谷川: うん。そのことを、パフォーマンスで話したことがあります。

北山: そうですか。

谷川: 山梨ではそんなことがあつて。小学2年生の頃に静岡に引っ越したら、また転校生っていう感じで、ずっと転校生っていう感じ。周りの人に慣れない口数の少ない子供で、学校の先生に1人だけ呼ばれて、部屋で色んな物を並べたりとかロールハッシュャテストみたいなのをやらされて、母親から「もしかしたら特殊学級に行かなきゃいけないかもしれないよ」と言われたりしました。でも静岡は、いじめ的な雰囲気は少しはあつたけれど、山梨のように暴力的じゃなかったかな。

山岡: そうですか。中学生になってからはどうでしたか？

谷川: 中学生の時は、よく精神的に苦しくなっちゃう感じで。いきなり息の吸い方がわからなくなつちやつて口呼吸をずっとしてたりしましたね。

北山: なんだか苦しい、って気持ちを持ってたんですね。

谷川: はい。父親がアルコール依存症で、成長期に胸が大きくなってきたら、ご飯の時に手を出してくるんですよね。そういうのも辛いし、思春期に毛が生えてきたりとか、みんなの前で言ったこととかを「恥ずかしい！」って落ち込んじゃったりするのも辛くて。

北山: お父さん、大変だったんですね。

谷川: わたしがまだ子供の頃から、父親はアルコールを飲んで色々ありました。朝仕事で早く出て行くので、家に帰ってきた後に昼間寝てるんだけど、子供がごちゃごちゃやっていると「寝られない！」って怒鳴られて。それでビクビクするような子供になっちゃった気もするけど。

山岡: 静岡の、どこですか。

谷川: 静岡市ですね。最初はね。山梨は最初どこだったんだろうな？甲府に移ったのかな。でも静岡が長かったですね、20歳の頃までいて。

山岡: 静岡は、高校出てからも？

谷川: そうですね。高校出た後、1年くらいフラフラして、そのあと1年くらい就職して。

山岡: 10代の時に、将来したいこととかそういうのってありましたか？

谷川: 歌手になりたかった。

山岡: おお！

谷川: 小学4年の頃に合唱部に入って、その時の担任の先生がすごく良い方で、母親と連絡ノートで「この子は音楽とか、そういうものが好きみたいだから」って、薦めて下さったんですね。それで合唱部に入って。合唱部の先生も面白い先生で、歌う時に体を揺らしながら歌うのをみんなに薦めてくれた。そのときだけはすごく生き生きとしてたって、先生が言ってくれて。

山岡: 楽しそうですね。

谷川: 算数とかは全然ダメだったけど、本とか音楽とか絵を描くのはわりと好きでした。音楽が一番好きだったかな。体を動かすのは嫌いじゃなくて、体育の創作ダンスの授業が好きだった。創作ダンスの時も体育の先生が「あんなに生き生きしてるあの子を見たことない」ってウルウルしていたと聞いたことがあります。

北山: 静かな子が元気に動いていて、嬉しかったんですね。

谷川: うん、そんな感じだったみたい。

北山: 中学生の時も歌うことは好きだったんですか？

谷川: わたしが中学校の頃って、当時、「スター誕生」という番組がテレビでやってたんです。萩本欽一が司会の番組。それもあって「歌手になりたい！」って先生に言ったら「そんなもん、なれるわけないでしょ！」って言われて。

山岡: なんでそんなこと言うかなあ。

谷川: 中学校の先生は、そういうのはちょっとっていう感じ。

山岡: 「頑張って練習したらいいわね」って言ったらしいのに。

谷川: 中学生の時に、「バルサイユのぼら」が流行ってて、それも結構ミーハーっていうか、すごい好きで。

山岡: 漫画を読んで、って事ですか？

谷川: 漫画も読んでたし。

山岡: 舞台があった。

谷川: そう、漫画もすごい好きだったんだけど、「宝塚」っていうのがあることを知って、ミュージカルが出来る学校に行きたい！って思っちゃって。先生に「宝塚へ行きたいから、高校はいけません」って(笑)。「心配ですね」って先生から言われちゃったんだけど。でも「スター誕生」のオーディションが静岡に来たとき受けに行った。

北山: 行動的じゃないですか！小学生の時と全然違いますね。

谷川: 高校生ぐらいだったのかな？ちょっと忘れちゃったけど。

山岡: 受けに行ったんですね。

谷川: うん、不合格だったけどね。

北山: あー、残念ですね！

谷川: そういうの受けると、営業の人が来て、「ヤマハの音楽学校行きませんか？ピンク・レディーもヤマハの学校に行ってたんだよ」みたいな話をされるの。「行きたい！」って親に相談したんだけど「お金がないから

無理」って言われてね。「明星」っていうアイドルの雑誌に、山口百恵が新聞配達やりながらお金貯めたって書いてあって、牛乳配達のバイトやろうかなとかも思うんだけど、早起き出来なそうだから(笑)。泣く泣く…。

山岡: そっか〜。そのあとは、どうしたんですか？

谷川: それでも歌手になりたいって思って、高校はミュージカルを教えている音楽の先生がいる星美学園っていう女子高へ行っただけです。私学だったから、なんでお金を出してくれたのか分からないけど。

山岡: ヤマハに行く方がちょっとまだ安かったかも？

谷川: よく行かせてくれたなと思います。クリスチヤンの学校だったんですよ。近所のすごい可愛い女の子の友だちが、「星美学園に行ってるんだ」って言ってたんですよ。イエスキリストとか、マリア様の綺麗な絵を持っていて、ロザリオとかも見せてくれて。これはなんか素敵だなあ、とミーハーな感じに思ったりして。

北山: キリスト教の学校って、かわいいグッズとかに力入れてますよね。女子校は楽しかったんじゃないですか？

谷川: うん。賛美歌を歌うコーラス部に入りました。ミュージカルを教えていた先生は、前の年に自殺しちゃったみたいなんです。

山岡: それは、残念でしたね……でも高校時代は、結構良いことがあったんですか？

谷川: 面白い友だちは出来ましたね。でもやっぱり大多数の人たちとはなじめなくて、変わった子だねって言われていました。カトリックの学校って意外と色々な問題があって、妊娠しちゃった子は退学になって、なんでだろう？って思ったり。キリスト教ってそういう教育なんだろうけど。

北山: うーん。

谷川: その頃は本屋で雑誌を見るのが好きで「宝島」を買って読んでた。「宝島」には、光州で大虐殺があったという記事や、先生の校内暴力、反原発、平和運動、ヒッピーの暮らしとかの記事が出ていて、パフォーマンスの記事もあったんです。東京のライブハウスでパフォーマンスしている、田中トシさんの名前は「宝島」で知ったの。あと、「自殺未遂ギグ」をやっていた「タコ」というバンドの山崎春美とかも。それで、こういう世界ってあるんだなって思ったんですよ。

山岡: 高校生の時ですか？

谷川: 高校生の時です。あと他に興味を持ったことは...当時は反戦や反原発運動があつて、近所に住んでいた中学校の先生がチラシを配ってたんですよ。体育の女性の先生で「合成洗剤を使うと危険ですよ」って内容の上映会を公民館に見に行つた。その先生に「また上映会があるから来ない？」って言われて行つたら、日本が中国で侵略戦争をしたっていう内容の映画で、いろんな社会運動をやっている人たちの集会だったんです。

山岡: チラシをもらって集会に出かけてたんですか？

谷川: うん、先生がやつた集会とか、無農薬野菜の市にも連れてってもらつて。鶏が外で走りまわつて産んだ卵ってすごい美味しいんだなあとかね。そこで知つた後、母親と「なんで合成洗剤使つてんの！」ってけんかしたりしたな。

北山: 色んな知識に出会つていったんですね。

谷川: はい。そういう社会活動を知るなかで、メジャーになつて歌う道だけじゃなくつて、違う表現方法もあるんだなつて思つたんですよね。高校卒業した後も、もっとそういう集まりはないかな？って感じでブラブラして、バイトをして、ヨガの本を読んで、ヨガ教室に行つて。そういう集会で出会つた男の人が連れてつてくれたアジミたいなところ.....ただのアパートなんだけど、そこでは静岡大学の人とか、反戦運動や労働運動をしている人とかが集まつて勉強会をしていた。共青同(共産主義青年同盟)という名前で、トロツキズムとのことでした。それにも面白そうだなと思つて参加しました。

北山: 本格的に社会活動をしている人たちと知り合つていった。

谷川: はい。浜岡原子力発電所の反原発デモに参加した時には、手書きのチラシもやつてみたいなと思つて、デモの時に持つていくゼッケンを手書きで書いたりとかしました。あと原発がどう危険なのかつていうことをレジメに書いて解説したりとか、なぜかしてて(笑)。自分の興味あることには、理解力があるんですよね。その時に、サクライさん(漢字不明)つていうおじさんに誘われて行つたら、オルグ活動みたいなのをやつて。普通の働いている人とか、静岡大学の学生とか、障害を持つている人で詩人つていう人もいて、すごい面白い所でした。

北山: どんどん積極的に関わつていった。

谷川: それで、なんとなく自分がやりたいのは、運動とか自然と共に生きるとか反原発とかなのかなつて思つたんです。当時は労働賃金を上げてくれという運動が主体だったけど、それは自分ではちょっと違つなつて感じがして。当時、反公害運動はお金持ちの主婦がやるつて言われてた時代だったんですけどね。

山岡: たしかに、そう聞きますね。でも、まりさんは自然とか環境の方に関心があったんですね。

谷川: はい。

2. 上京～「セツ・モードセミナー」、「ピースボート」

谷川: その頃くらいから、両親と全然意見が合わないので一人暮らしをしようと思って、小さい安いアパートで一人暮らしを始めました。

山岡: 静岡で、バイトしながらですか？

谷川: ええ。その頃に無農薬の野菜市にいたヒッピーの人に会って.....男性でお寺に住んで、お寺の事をやりながら活動してる人だったんですけども。わたしは環境問題に関心が合って、その人に関わったんだけど、だんだん付き合っていくうちに、女の人がまわりに何人もいて、なんかなあと思ってきて。

北山: その男の人をサポートしている女性たちがいたんですね。

谷川: わたし、その人にはお金を取られていて...

山岡&北山: え！？

谷川: 「地球の友」っていう、グリーンピースに近い団体の冊子があって、その中に「エコビー」っていうフランスのコミュニケーションをやってる人たちの記事がのってて、行ってみたいって思ってたんだけど、「フランスに行くためにお金が必要だから」とその男の人に言われて、100万円...はいてないと思うけど、まあまあ大きなお金をクレジットで借りて渡しちゃったんですね。そしたら、そのままどっかに行っちゃって。

北山: そんなことが。

谷川: それを機に東京の方へ上京したんです。その時に知り合ったヒッピーの1人が「霜田誠二新聞」を見せてくれて、「何これー！これを是非見に行こう」と思って。あと西荻窪の「ほびっと村」にも行ってみたいと思っ

山岡: 「霜田誠二新聞」はその頃パフォーマンスのこと、書いてありました？

谷川: その頃、霜田さんはパフォーマンスを毎月やってたんです。「すずめ式」とかのシリーズ。わたしが行ったときは、「すずめ式」独断舞踏会って書いてあったかな。

山岡: そうですか。

谷川: あと「宝島」で、青山に「発狂の夜」っていうライブハウスがあるとかも聞いて。吉祥寺の「曼荼羅」とかも。

山岡: 上京する理由が色々出てきた。全部「宝島」情報ですね。

谷川: 何回か東京に行って、そのうちそのまま東京駅に1泊しちゃって。早稲田大学が出しているアルバイト新聞っていう学生のための部屋紹介のチラシを見ながら、アパートを探しました。田端に3畳1間のところを見つけて。

山岡: 引っ越したの？前の家は引き払って？

谷川: そうですね。

山岡: 親にも相談せず、勝手にやっちゃう、みたいな。19歳くらいのときですか？

谷川: それは、20歳だったと思う、1983年くらい。とにかく好きなことをしようと思って。美学校とセツ・モードセミナーのどっちかに行きたいなと思ってセツ・モードセミナーが安いし、カッコいい感じがしたから、そっちを選びました。

山岡: 美学校の泥臭さ。なんかあるよね。

谷川: セツ先生が男性だったんだけど、女性に見えるような人で、こんなカッコいい先生いるんだって。

山岡: 広告で見たんですか？でも、歌と音楽が好きだったのに、なぜ美術系に？

谷川: なぜだったんだろう...

山岡: ゼッケンを描いたり、チラシを作ったり、そういう作業でデザイン的なものに目覚めたのかな？

谷川: 目覚めたのかなあ、絵を描くのは嫌いじゃなかったんで、そういうのも勉強してみたいな、っていうのはあったんです。

山岡: それは「宝島」の広告とかで、募集を見たんですか？

谷川: 多分そういう中の1つで。

山岡: 音楽系の学校って、YAMAHA なら別だけど、ちょっとハイソサエティだもんね...

谷川: 服飾系にも興味があった。

山岡: 「セツ・モードセミナー」って、随時入れるんですか？

谷川: 確か4月と9月という感じでした。上京して田端に住んで、しばらくして「セツ・モードセミナー」に行った。

山岡: 上京した時に東京に知り合いはいたんですか？

谷川: いなかった。静岡で情報を集めてって感じでしたね。

山岡: バイトして、って感じ？

谷川: そうですね。その時は色々探したんだけど、とにかくお金を返さなきゃいけないって、むこうみずだったのでピンクキャバレーで働いたんですよ。「ブルースカイ」というお店で、五反田にあったんですけど。当時、素人っぽい女の子とか重宝されて、気持ち悪かったけど自分は他に何もできないし。

北山: 静岡の時はどんなお仕事をされてたんですか？

谷川: 静岡では1年間事務で就職してました。高校の時の久保田先生が紹介してくれた小さい会社で。

山岡: 地元はやっぱりつながりがあるからね。

谷川: そこも面白かったんです。「西式健康法」に基づいて、水酸化マグネシウムから下剤を製造して通販してるところ。「西式健康法」っていうのは、1927年に西勝造という人がはじめた健康法で、腸をきれいにする断食法が有名なんです。体操もあって朝は食べなくて2食、とかそういう感じ。西さんは、最初は農薬を作っていたらしいんだけど、農薬が環境や体に良くないことが分かって、自分の技術を良い方向に役立てたいってことで始めたみたい。小さいスペースに製造する機械があって、おばあちゃんが瓶に下剤を入れてキャップをした。

山岡: 興味のある内容とつながってる会社なんですね。

谷川: その時に、なんで辞めちゃうの？他にこんなところないよ、って言われて。だけど「わたしは東京に行きたいんです！」って言ってね。

山岡: 東京ではバイトしながら、自分の生きたいように生きて、「ほびっと村」に通いはじめて、勉強もしようと思っ、「セツ・モードセミナー」に行ったと。えらいですね、積極的。

北山: 「セツ・モードセミナー」ってアートも教えてるんですか？

谷川: 当時はクロッキーと水彩画だけだった。あと服作る科目もあったけど、そっちは行かなかった。クロッキーはカッコいい、やせていて背が高いモデルさんじゃないとダメなの。そのモデルさんの裸を描く。そればかり。真ん中にモデルさんがいて、色んな格好して10分間で1枚。どこで描いても良くて、セツは自由な学校です、みたいな感じでやっりましたね。

北山: ポージングも、モデルさんみたいな感じですか？

谷川: どうなんですかね、その人自身がきれいだから。セツ先生は、すてきな洋風建築の学校の上の階に住んで、気に入った子がいると仲良くなっったのかな、みたいな。

北山: その頃は、絵を描く勉強が中心だったんですか？

谷川: あ、そうだ！「ピースボート」に参加したんだ！1回目の「ピースボート」に乗ってサイパンとかグアムとか回っ。辻元清美さんが仕切っったの。若くてきれいだった。

北山: 東京に出てきた後だから、21歳頃ですね。

谷川: 「宝島」でよく記事を読んできた気功の先生とか、太極拳の津村喬さんとかも乗っっていて。船の中で、色んなワークショップがあっったんですよね。その時よくそんな大金持っったなあ。お金返さなきゃいけないのにね。

北山: 今しか行けないうって思っったんですね。

谷川: 今よりは安かっったと思うけど、9万円ぐらいはした。だから、明日本当に辻元さんにお金を持ってくのかなあとか、考えました。

北山: ピースボートでは、どんな出会いがあっったんですか？

谷川: その時ピースボートに乗ってたのは、石坂啓さんという漫画家の方とか。石坂さんは社会問題を扱った漫画を描いてましたね。世田谷の議員の保坂展人さんは「高校生裁判」で、中学生の時に政治活動をしていたことを内申書に書かれたことで高校に落ちた、ってことで戦ってた(麴町中学校内申書事件)。中曽根総理大臣の時代で、今よりずっと日本は豊かだけど、反政府運動みたいな気運はあったのかもしれない。

山岡: 83年というのは、まりさんにとって重要な年なんですね。その頃、まりさんは「ピースボート」の平和運動のムーブメントとパフォーマンスの両方に関わってたんですね。

谷川: やっぱり自分で見てみようって感じだから。ちょうど「ピースボート」から帰ってきた頃、「全共闘」についての映画が池袋の「文芸坐」で上映していて、見に行った記憶もあります。その頃は、昔に学生運動があったことを、また別の形で運動にしていって動きがあったんですよ。

3. 霜田誠二氏との出会い、「土湯温泉」、「公民館運動」

山岡: パフォーマンスにはどうやって出会ったんですか？

谷川: それは、霜田さんの「独断舞踏会」を、毎月観に行っちゃって。

山岡: どこでやってたんですか？

谷川: 「キッド・アイラック・ホール」ですね。

北山: 観に行って、話しかけたんですか？

谷川: パフォーマンスの後に、「飲みに行きませんか？」ってなって、西荻の飲み屋さんに行って。霜田さんが「今、福島の土湯温泉の企画に呼ばれていて、一般公募で10分間誰でも参加出来る企画をやりたい。前からやりたかったんだ」って話していて、それに参加してパフォーマンスを始めました。



土湯温泉パフォーマンス&シンポジウム'84 全記録カタログ

山岡: カタログを作ったんですね。

谷川: この写真撮ってくれた会田健一郎さんは亡くなられたんですけど。

北山: ここでやったのが、初めてのパフォーマンスですか？

谷川: たぶん初めてです。

北山: 初めてパフォーマンスをする時、どんな感覚でしたか？何をやればいいのか分からない！ってことはなかったんですか？

谷川: どんなふうに.....やりたいと思ってた。歌うっていうのを。自分のアパートで1人で踊るのも好きだったし、「なんでも良いからやりたい！」っていう感じだったかな。

山岡: パフォーマンスらしいものを見たのは、霜田さんが最初？

谷川: これ、1984年じゃないですか。その年ってローリー・アンダーソンとかシンディ・シャーマンとかヨーゼフ・ボイスの展覧会がやっていて、「パフォーマンスってすごい！パフォーマンスって、なんか、違うんだ！」って感情的な盛り上がりがありました。だから、「なにをすれば良いの？」っていうんじゃなくて、「やりたい！」と思いました。

山岡: 土湯温泉の前にはパフォーマンスをしたことはなかったんですか？

谷川: ないと思いますね。歌を人前で歌ったっていうのは、パフォーマンスの一種なのかよく分からない。

山岡: 人前で歌ったんですか？

谷川: それは小学校、何年生か忘れちゃったんですけど、朝礼で校庭に集まるじゃないですか、全校生徒。そこで「どじょっこふなっこ」を歌った。

山岡: 1人で歌ったって、なぜですか？

谷川: 思い出せない。度胸だめしでやったのかな。

山岡: パフォーマンスは、自分としては面白かったって感じなんですか？度胸があったってことだよな。

谷川: そうですね。そこでは、歌を歌おうとして、マイクの前に立つけど、そこでひっくり返って別のことをするっていうのを、パフォーマンスとしてやったんですよ。それで、その間に歌ってるみたいな。場所は特設のステージがあって、1人10分くらいやる。10分って初めてやるのには、ちょうどいい時間だなと思う。

北山: 今のニパフの10分ずつっていうのと一緒にですね。

谷川: そうですね。今、10分ずつなの？

山岡: なぜか外国人は20分で、日本人は10分とか。

谷川: 土湯温泉の時は、参加料として3000円ぐらい払ったのかな、それで温泉入り放題で、旅費は自分で。

山岡: 別々に行くんですか？現地集合？

谷川: 現地集合でした。郵便で、手書きの募集のチラシが来て。

北山: なぜ土湯温泉でイベントをやることになったんですか？

谷川: 霜田さんがその地域の温泉祭にパフォーマンスやってくださいって呼ばれたらしいですよ。でも1人じゃもったいないから、この機会にいろんな人に来てもらおうみたいな感じで。

山岡: その経験はどうでしたか？

谷川: これはもう、すごい楽しかったですね。この企画に出たときは、福島のニュースでもテレビ放送されて、わたしも出て、結構話題になったんですよ。

山岡: パンフレットは「カニ書房」って出版社から出てるんですね。

谷川: これは温泉街の人が作ってくれたから。

山岡: そんなノリだったんだね。ここのページのデザインした人、ちょっとある種の趣味性がありますね。企画はサウンド系も多いですね。あとメディア・アート。粉川哲夫さんが出てるのが、すごいその時代って感じがするね。これ粉川さんじゃない？

谷川: うん、粉川さんは「ラジオホームラン※」っていうのをやってて、その人たちが来てた。(※1983年に開局し90年代半ばまで放送されたFM電波を使っただけのミニFM局の一つ。粉川哲夫氏がイタリアのアウトノミア運動を紹介し、和光大学粉川ゼミの卒業生たちが下北沢の放送局から放送した。大学の外で学生時代のような芸術や文化、社会について議論ができるスペースを求め実践した。黒田オサム氏のアナーキズム講座も放送された。)

山岡: そっか、写真が時代を感じるね。

谷川: こういう感じで温泉入り放題。

山岡: その町と提携してるわけ？

谷川: ホテルがあって、どのホテルの温泉に入ってもいい。

山岡: 温泉街も若者に来て欲しいっていうのはあったのかもしれないですね。入ったって温泉が減るわけじゃないからね。

谷川: 裸でギターを弾いた青年がいて、捕まってしまったり。

北山: 霜田さんも捕まったと聞いたことがあります、この時でしょうか？

谷川: 霜田さんも捕まったのかも知れない。わかんない、忘れちゃった。あ、霜田さんも逮捕されたねー。ここに書いてあるね。

北山: この時でしたか。

山岡: それで、これからも霜田さんに誘われたらやろう、みたいに思ったんですか？



第4回公民館運動 チラシ

谷川: そうですね。そういうふうに行きたいなあ、と思ったかな。

山岡: 85年の「公民館運動」っていうのは？

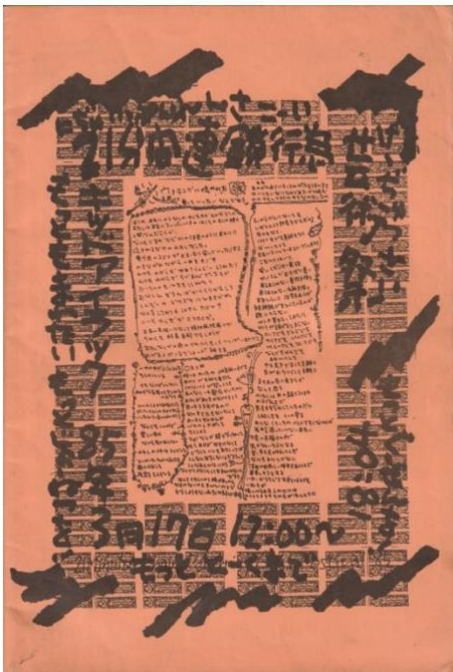
谷川: 「公民館運動」は、アメリカの公民権運動をもじって、公民館は安いし誰でもできる、っていうことで始めたんじゃないかな。

北山: 面白いですね。

谷川: その後に「21分間行為芸術祭」があって。それはフリージャズの人とか、「風の旅団」とかが出てました。あと乙部&福本さん(乙部聖子、福本健修)って、この文を書いている人たちも、土湯ど「21分間行為芸術祭」とあと、「ブック・メディア・パフォーム」に出てました。

山岡: ブック...本ですか。

谷川: 本に1人1ページ、なんでも好きなことを書いていく。あと「1分間フリーソング・テープ」っていうのもあって、それも1分間、歌を順番に歌って録音する。そういうのに霜田さんの呼びかけで何人か参加してた。



21分間連鎖行為芸術祭 カタログ

山岡: 他にも、この「21分間連鎖行為芸術祭」っていうのもありますね。21分間というのは、どこから.....?

谷川: 21分間で交代するの。3人のアーティストが前にいて、20分パフォーマンスした後、最後の1分間で次の人が入ってきて、一番早く入ってた人が抜ける。だから連鎖行為だね。

山岡: この時は、もう荒井さんも参加してるんですか?

谷川: これ、出てるかな。荒井さんの友達が出てる。

山岡: これは連鎖行為のカタログですか? 誕生日順に出てるのか。

谷川: これが、わたし。2月17日で、向井千恵さんと誕生日が一緒だから。

北山: 参加者多いですねー。手書きのアーティストページがあるんですね。

山岡: (霜田誠二氏のページを見て)これ葉書なんだね。「葉書を送れ」って書いてあるから、それを集めたんだ。こういうのをマメにやったんだね。すごいね。

谷川: 霜田さんは、アパートの部屋いっぱいTシャツを並べて、アクリル絵の具で絵を描いて、それを売って生活してましたね。

山岡: 「荒井真一インタビュー」っていうのも載ってる。

北山: これは自分で自分をインタビューしてるっていうことなんですね。

山岡: これ面白いよねえ。あー、このページは「霜田誠二新聞」だ。

北山: 変わってないですね。

谷川: 今も書いてるのかな？

北山: 1回書くのをやめてたと聞いたような。でも、2010年くらいにもう1回書き始めて、その頃わたしもNIPAFに参加していてインドツアーにもみんなで行ったんですけど、移動の電車の中で書いてましたね。

山岡: あーこのチラシにある、「天国注射の昼」(野外音楽堂 1983年)ってなんか聞いた事が。

谷川: そう、文化屋雑貨店っていう渋谷の雑貨屋さんあったんですけど、そこにこのチラシがあって、それで見に行っ、初めて「赤木電気」を知って。

山岡: 荒井さんに会ってしまいました？

谷川: あはは！わたしは観客で、その時は全然顔を合わせなかったけど。荒井真一さんとはじめて会ったのは、「公民館運動」で同じ回に出て、その時かな。荒井さんは、小金井だったかに住んでて...近かったんですよ。わたし、吉祥寺に住んでいたから。それでよく飲みを誘われて、吉祥寺の焼き鳥の伊勢屋に行っ

て。

山岡: 色々とパフォーマンスとかイベントを見に行くのが好きで、あちこち行ってる中で段々とパフォーマンスを始めていったんですね。

谷川: そうですね。その頃は霜田さんのを毎月見に行ってたな。他には、見には行きたいと思ってたけど、そんなには見てなかった。

山岡: 経歴にある、「おとなしい人たち」というイベントはどんなことをやったんですか？

谷川: 「おとなしい人たち」は、霜田さんが「公民館運動」を、「ずっと同じようなメンバーで同じようなことをやっってる雰囲気が発展がないから、僕は辞めます」って言って抜けて、その後に乙部聖子さんと福本健修さん夫婦が続けたんです。

山岡: おとなしいの「おと」は乙部から来てるんですか？もしかして。

谷川: どっから来たんだろう。大人しいのに意外とやるじゃん、って意味かな。

山岡: 「公民館運動」は、霜田さんが始めたんですか？

谷川: 霜田さんが始めたけど、抜けちゃった。霜田さんは、「別の形で発展させていこう」って言ったり、「やっぱりそんなのくだらない」みたいに言ったり。

山岡: 「公民館運動」が「おとなしい人たちに変わったんですね？

谷川: そうですね、月1ぐらいでやっていましたね。

山岡: この「タンツ・テアトル」っていうのは、まりさんと霜田誠二のユニットなんですか。

谷川: 誘われて、和光大学でやりました。ピナ・バウシュ、ヴッパタール舞踏団の「タンツ・テアトル」を霜田さんが好きでやりたい、という話で。そのときに誘われて行ったんです。なにをやったか全然思い出せないけど、参加した。そのとき参加したのは、わたしだけだったからデュオみたいになったんです。

山岡: 参加者、1人になったんですか、結局？

谷川: そう。それで2人でやった。霜田さんと2人で「タンツ・テアトル」。その1回だけでした。

山岡: どの点がピナ・バウシュっぽいんですか？

谷川: 踊りだけど、中で日常的な動きをするとか、そういうとこじゃないかな。

北山: 「ブックパフォーマンス」と「1分間フリーソング」も霜田さんの企画ですか？

谷川: そうですね、霜田さんとその周りの人たちが。あと和光大学の粉川さんたちの「ラジオホームラン※」っていうのは、普通のメディア、マスコミのメディアじゃなくて、自分たちのメディアを作ろうという動きだった。(※1983年～90年代半ばに、始まったFM電波を使ったいわゆるミニFM局の一つ。粉川哲夫氏がイタリアのアウトノミア運動を紹介し、和光大学粉川ゼミの卒業生たちが下北沢の放送局から放送。大学の外で学生時代のような芸術や文化、社会について議論ができるスペースを求め実践した。黒田オサム氏のアナーキズム講座も放送された。)

北山: 「21分間行為連鎖芸術祭」のカタログとか、こういうのも自分たちのメディアとしてやっているという...

谷川: 参加する人が自分の紹介を、一人一人書いてるんですよ。

山岡: ミニコミ全盛期なんですよ。わたしが高校生の時にはまだコピー機がなかった。80年代になってコピー機が出来て、こういうのが簡単に作れるようになったから。

谷川: コピー機が会社に入ってきて、わー！みたいな感じで、なんでもコピーしてね。

山岡: それまでは青焼きだったと思うんですよ。こういうミニコミが爆発的に始まったんですよね。

北山: コピーが出てきた事で、軽やかに表現できるようになったということですか？

谷川: そうですね。「ブック・メディア・パフォーム」も、公募して書いてリレーしていくみたいな感じ。霜田さんがそういうのが好きだったんだと思いますね。これはわたしの書いたやつを表紙にしてくれて。若かったから持ち上げてくれたのかな？

北山: 選別された意見だけじゃなくて、公募したみんなの意見を全部載せていくというのにも、反体制的なものを感じますね。

山岡: さっきの「タンツ・テアトル」みたいに、日常のことをして見せるっていうのにも、つながっているのかもね。

谷川: そうかも知れない。

北山: どんな人たちが参加してたんですか？

谷川: 「ブック・メディア・パフォーム」には、拘留所の中の人何人が参加していました。霜田さんは「東アジア反日武装戦線」の人たちとの関わりがあったと思うんですよ。山谷の運動の人とも。当時は、「三菱重工爆破事件」に関わってた人が何人か拘留されて裁判をしていて、死刑反対を訴えてる人たちもいたから。

北山: 霜田さんが「三菱重工爆破事件」の話をしてたのも聞いたことがあります。

谷川: ここ1、2年前に亡くなられた方もいて。こないだ、その方からの当時の手紙がダンボール箱の中から出てきて、「ちょっと気になったのでお手紙書きました。実は、僕はそういう事件で勾留されてます。裁判で戦ってます」みたいに書いてあったりして、感動しましたね。

山岡: このプロフィールを見ると、85年頃はパフォーマンスを数多くやってますね。

谷川: この頃は、そうですね。「いつも出てるね」って嫌味言われたり(笑)そのぐらい、やりました。

北山: パフォーマンスに、魅せられていた時期なんですよ。

谷川: そうですね。やっぱ霜田さんを見て、回数多くやるのがカッコいいんじゃないかって思った。

山岡: 最初の時は、歌っては回転？

谷川: 歌おうとして、でんぐり返し。

山岡: このパフォーマンスは、長く続いたんですか。

谷川: 結構そういうパターンはありましたね。あと、自分でリュックサックの中に、物を入れといてそれを途中で取り出して投げたりとか。

山岡: それって進行具合は決めといてやるのか、それとも即興的な部分が大きいんですか？

谷川: やる前に妄想みたいに湧き上がってきて、マテリアルはこれとこれを持っていこうって決めますね。これを使ってこういうことやりたいなって頭に浮かぶけど、実際やる時はその場の雰囲気で行っていく。

山岡: なにかメッセージがあるタイプですか？それともダダって言うかシュールな感じですか？

谷川: いや、ダダとかそんなカッコよくなくて、ただなんかやってたって感じですけど(笑)

山岡: じゃあメッセージがあるとかいうことではない？

谷川: でも反原発に興味があったので、そのことを伝えようとしてたんだと思います。やっていく中で自分のオリジナルの表現が出てくるのかなって思っていました。歌みたい。なので、ダンスとか技術を身に付けて、それを表現していくっていうのは.....

山岡: ダンスではないってことですか？

谷川: そうですね、ダンスもやりたかったんだけど、でも体全体で動く表現は自分には出来ないなって思ってた。

山岡: 作品タイトルにしてもイベントタイトルにしても、文学的というか、詩のようなタイトルが多いですが、やってた内容もポエティカルなんですか？

谷川: 自分の日記を読んだりとか、そういうのはやりました。

山岡: それは本当の日記ですか？

谷川: 本当の日記ですね。言葉がはっきり聞こえないように読んだりとかするパフォーマンス。

山岡: 意味を伝えようとしてるのではないってことですね？

谷川: そうですね。

4. 「会津アートカレッジ」、85年以降のイベント

山岡: 80年代に「パフォーマンス・フェスティバル・イン・檜枝岐」は行かなかったんですか？

谷川: 行かなかった。福島は、ずっと後ですが、三島町の「会津アートカレッジ」というイベントは行きました。「会津アートカレッジ」は、「除夜舞」に出てる大串孝二さんが、ずっと続けているみたいですね。

山岡: 観にくる人は、宿泊出来て、食費込みで参加料6,000円。

北山: 「会津アートカレッジ」は、どなたの企画ですか？

谷川: これは星野共さんっていう、大学の先生。優しい方で、うるさくしたりワイワイしたりとか、そういうタイプじゃない。霜田さんと正反対。

山岡: 87年に、参加したってことですよね？

谷川: そうですね、そのまま半年ぐらい向こうへ行ってた気がする。その時は、高田孝子さんが川べりで踊ってて、こんな踊りあるんだなあって思ったな。

山岡: そのときに舞踏をはじめて見たんですか？

谷川: いえ、静岡には田中泯のワークショップが来ていたので、見たことはあったんです。ワークショップには参加しなかったんだけど。こういう踊りをする人いるんだなって思いました。

山岡: まりさんの作品に舞踏は影響しましたか？

谷川: そんなに影響はないけど、でも大野一雄さんを見たときは、涙が出てきて、大野一雄さんはすごいと思った。

山岡: 涙が出るっていうのは、どういう気持ちになっているのかしら。

谷川: なんだろう、分からないけれど、文章とか言葉とか物語みたいなもので涙が出るっていうのではなくて、動きですよ。

山岡: 感動ですか？なんか悲しいとか嬉しいとかそういう？

谷川: 悲しいとか嬉しいとかじゃなくて、こんなに美しいものがあるんだって、心を動かされる感じ。84年に来日したパフォーマーの中で、モリサ・フェンレイ(Molissa Fenley)っていうダンサーがいて、文化服装学院で女性3人で川久保玲の衣装を着て、坂本龍一の音楽でパフォーマンスしたんですけど(「The Next Wave of American Women」4人の女性アーティストの企画。ツルモトルーム、1984年)、それを見たときも、やっぱり涙が出てきちゃった。ダンスはやりたいなどは思ってたかな。

山岡: そうですか。

北山: 色々活動していく中で、同じようなことをしている人に会って、一緒にやろうよってことはありましたか？

谷川: はい。フリージャズや音楽の方とか。風巻隆さんは、パーカッショニストで、いろんな人とデュオして行く人だったんで、風巻さんの企画にも2回ぐらい参加させてもらいました。

山岡: パーカッションが鳴る中で、パフォーマンスしたんですか。

谷川: しましたね、あとサクスを吹いている人がいたりとか。

北山: 音があった方がいいのか、ない方がいいのか、とかありますか？

谷川: 全然そういうこと、その時は考えてなかった。「自分にどういことが出来るんだろう？どういことが起きるんだろう？」って思って、そういうのが楽しいなと思ってた。

北山: 「1人だと思いつかないようなことが出来るかも！」とか、冒険するような気持ちがあったんでしょうか？

谷川: でも「よく1人でやったら？」って言われたりはしました。自分もやりたいとは思ってたんですけど、そんなに積極的になれなくて。でも20代後半ぐらいからは、下川真由美さんがソロのパフォーマンスを企画してくれました。

山岡: そうですね。それはビデオをお借りしましたね。この乙部聖子さんっていう人は、どんな表現する人なんでしょうか？

谷川: 乙部聖子さんが、どんなことやってたか.....あまり覚えてない。

山岡: 向井千恵さんは胡弓。どうして胡弓の人が、もちろん音楽の人も出てるけど、いつもパフォーマンス関係のところの名前があるのか、いつも不思議に思ってるのですが.....

谷川: 向井千恵さんは昔から霜田さんの企画にも出てたし、日比谷の野外音楽堂にも出てたから。

山岡: 胡弓を弾くんですか。

谷川: そうですね。「透視的情動」っていう即興イベントは、向井さんが企画して、何人が集まってやりました。

山岡: 91年って、まりさん、たくさんパフォーマンスしているんですね。この11月の「荒井真一展～漂泊者とその影～」と「私の中のマジョリティー」とかは。

谷川: これは荒井さんとサエグサさんの「現場の力」で、キリンプラザ大阪でパフォーマンスやったんですよ。その企画の名前が「私の中のマジョリティー」っていうタイトル。

山岡: 「私の中のマジョリティー」は荒井さんの作品ってこと？

谷川: そうですね。

山岡: 《fruit rouge～赤果実～》は？

谷川: これはイベントに参加した時の、わたしのパフォーマンスのタイトル。

山岡: 《fruit rouge～赤果実～》は、どんな作品なんですか？

谷川: これはトマトをつぶしたり、トマトを投げたり、自分にかけてたりとか。つぶして自分にたらしたりとか。そういうことをやっていたので、こういう名前にしました。

北山: 3回ともトマトを使っているんですか？

谷川: だいたいトマトだったと思いますけど。やる行為は似たような感じだったと思う。91年8月には、その作品で「田島パフォーマンス・アート・フェスティバル」に参加しました。霜田さん関係じゃなくて、「S T スポット」(横浜)とか、福島の星野さんの企画だと思います。

山岡: 91年は霜田さんの企画にも出ているんですよね。これは単発のイベントですか？

谷川: そうですね。わたしがやったパフォーマンスは、原子力発電所の「もんじゅ」っていうのがあって、そのことが…

山岡: その時は、原発のことが気になっていたんですか？

谷川: はい。関心がありましたね。青森の六ヶ所村でも、周りにテント張って暮らしながらイベントをやる人たちがいて、80年代の終わりか、90年の始めに行ったことがあります。「公民館運動」で友だちになった同じ年代の女性がいて、その人はヒッピーとパートナーになって北海道のコミュニンに移ったんだけど、その人と青森の六ヶ所村で再会しましたね。「すぺーすしょう中野」の「踊る女3人展」(1988)で知り合った人が青森に連れてってくれたんですが、その道中がもう大変だった。

北山: その頃、よく一緒にやっていた人は荒井さんと霜田さんと、あと風巻さんとサエグサさんですか？

谷川: まあ、そのあたりは多かったかな。

山岡: いつ結婚したんですたっけ？2000年過ぎてからでしたよね？

谷川: そうですね。2000年前後だったから。結婚して20年経ってる。

山岡: だと、2002年くらいか。この頃から仲良かったんですか？知り合ってからだいぶ経ってから結婚しますけど。

谷川: よく荒井さんに飲み連れてってもらった時に、サエグサさんが来ていて。

山岡: そうだったんですね。

谷川: 神田の「葡萄舎」で結婚のパーティしたんですよね。お金が無いから、式はやらなかったんですけど。

北山: 荒井さんもですが、みなさん「葡萄舎」でつながっているんですね。

谷川: 照明の「ソライロヤ」のトンちゃんが、ウェディングドレスを新聞紙で作ってくれて。

北山: アーティストの方って、楽しい結婚式してて良いですね。

山岡: サエグサさんとは、どんな企画で一緒だったんですか？

谷川: サエグサさんと荒井さん、あと平川典俊さんと田崎英明さんという人と「Visual AIDS TOKYO」っていう活動を一緒にやったんです。霜田さんが「アメリカでは Visual AIDS という活動をやってたから、ここでもやりたい」ということで、色んな人が集まったんだけど、また霜田さんどっか行っちゃって。

山岡: 「Visual AIDS TOKYO」は、主となっていたのは霜田さんだったけど抜けちゃったんですね。荒井さんも入ってたんですか？

谷川: そう。それで「CABARET FOR AIDS」っていうイベントと展示をやりましたね。

山岡: 1992年ですか？

谷川: そうですかね。だいぶ現代美術っぽくて、カッコいい感じにしていました。赤いネオンサインで文字を書いて...石川雷太さんも似たことをやってたけど、それを意識してたのかもしれない。

北山: Visualize とエイズを掛ける？

谷川: そうですね。最近あまり出てないけど、田崎英明さんという人がエイズの問題についての中心人物だったんです。

北山: 評論家はその平川さんっていう方と田崎さんという方が、企画に関わってたんですね。

谷川: そうですね。

山岡: 荒井さんの話にはまるで出て来なかった。

谷川: えー。あんなに熱心にやってたのに。「エイズは人を殺さない。私たちの無関心が殺すのだ。」ってポストカードを作ったり、荒井さんとサエグサさんのパフォーマンスで「Living with AIDS」って大きく書いたものを電車の中で持って進んでいくっていうのがありました。「CABARET FOR AIDS」のパンフレットに写真が載ってます。

北山:まりさんは、どんなことをやったんですか？

谷川:同じように日記を読んだりとか、何か「動き」みたいなのをやっていました。

山岡:わたしがまりさんを一番最初見たのは、明大前のキッド・アイラック・ホールでした。霜田さんとまりさんのパフォーマンスで、まりさんが長いスカートを履いて、台の上に乗ってこうスカートをヒラヒラとしてた。戸川純を想起させました。それまで、まりさんのパフォーマンスはほとんど見たことがなかった。

谷川:キッド・アイラック・ホールは、いろんな人がやってたからね。

山岡:この97年の《みどりいろ》っていうのは？

谷川:《みどりいろ》っていうのは、緑色の服を着てゲリラ的にプールに浮かんだり、柵の所に乗ったり、踊りみたいなのをやったり。廃校になった校舎で、ほかのアーティストはプログラムに沿ってやったんだけど、わたしはゲリラ的にやりました。

5. 《泥の子供 ジャミラ》

山岡:98年からの《泥の子供 ジャミラ》は、シリーズでありますよね？

谷川:これは及川さんの企画です。当時、及川さんが三鷹の「アルトー館」の「ミルテの丘」という場所でレッスンをしていた。

山岡:ジャミラってどこから来たんですか？

谷川:ジャミラはウルトラマンに出てくる顔と肩と体が一緒になってる怪獣で、首がなくて皮膚はひび割れていて、人間みたいなもの。

山岡:どうしてそれを作品にしようと思ったの？

谷川:それは、人間なんだけども知らないうちに化け物化しちゃって、死んだときに土に還っていくというイメージがあって。環境問題を考えていたんじゃないかな。《ジャミラ・B》って名前にしたのは、なんでだったんだろうね。

北山:写真ってあるんですか？



《泥の子ジャミラ》1998年 加藤英弘撮影

谷川: 加藤英弘さんに撮ってもらった白黒の写真があります。画用紙に緑色を中心にいろんな布とかを付けて、オブジェみたいなものを被って絶叫して、みたいなパフォーマンス。(写真を出して)これこれ。こういうの作って、「STスポット」でやりました。欽ちゃんの仮装大会みたいって言われたな(笑)。下川真由美さんが高田馬場の「プロト・シアター」で、わたしのソロを企画してくれて。

山岡: そうですね。ビデオをお借りしているので、見るのが楽しみです。

谷川: その前後で静岡に4年間くらい帰ったんですよね。家賃を踏み倒しちゃって。

山岡: そういえば、ピンクのお店はいつまで働いたんですか？

谷川: 20代の公民館運動の途中まで。乙部聖子さんの「おとなしい人たち」に参加していた頃には辞めた。86年とかかな。だから、そんなに長くやってなかった。

山岡: 借金返して、他のバイトに移ったんですか？

谷川: そうですね。パン屋さんで働いていました。自分の活動をしたと思いつつも、何をやっていいのかわかんないって感じで暮らして。結局、お金がなくなっちゃった。

山岡: でもだいぶ経っていますよね。パン屋さんでは10年くらい働いてる。

谷川: パン屋さん、あとクロッキーモデルもやったりとか、組み立て工場で働いたりとかしましたが、辞めたりやったりであんまり頑張れなかった。

山岡: それはこういう活動もあるからですか？それとも働く先があまり好きではなかった？

谷川: 仕事ができなかったし一般常識もなかったと思うし、続かなかったし、いつも何かをやりたかったし。両方あります。

山岡: ちょうど東京に出て10年。

谷川: そうですね。一応は頑張っていたけど。霜田さんが海外にずっと行っちゃって、あんまり交流がなくなってきた、それで田島のフェスティバルに出たんじゃないかな。

山岡: まりさんが、ダンスや舞踏、パフォーマンスを一気に知った中で、表現方法としてダンスや舞踏もやりたいていうのはあったのでしょうか？それとも自分はパフォーマンスだな、って選んだとか、変遷はありますか？

谷川: ダンスはやりたいとは思ってたんです。小学校時代にダンスをやったのが楽しかったっていうのがあって。84年頃にモリサ・フェンレイを見た頃は、自分はダンサーだって思いながら道を歩いていたこともあった。でも身体訓練はしてないです。

山岡: そうなんですね。

谷川: その頃は、いつも働くことや働く時間ってなんだろうって、ずっと考えてましたね。せっかく自分のやりたい事、歌手になりたいと思って生きようとしても、なにかあきらめてるといふか。マスメディアではない表現活動があるっていうことは段々と知っていったんだけど、どういう形で続けていくかは、やりながら考えてた。やらなかった時期はアルバイトで忙しかったのかな。

山岡: やらなかった時期っていうのは、静岡帰っていた時ですか？

谷川: そうかな。その時は精神的に暗くなりがちで、自殺はしないけども死んじやいたい、みたいな気持ちによくあった。次にパフォーマンスをやったらその時死ねばいい、みたいなことを日記に書いていて。静岡に帰る前は、まあまあ自分のやりたい感じでやっていて、荒井さんがよく行ってた「伊勢屋」の近くにある「下駄屋」っていうところでバイトしてたんだけど。

山岡: 「下駄屋」は下駄を売ってるのではなく……

谷川: ご飯と飲み物を出すお店。「下駄屋」さんが援助してくれる話があったのだけど、やっぱり怖かったから。

山岡: 「下駄屋」さんは、男の人ですか？

谷川: いや、ママさんなんだけど、なんかね。

山岡: 要するにちょっと詰まっちゃったって感じ。

谷川: そうですね。一旦、田舎に帰って親に対して罪滅ぼしじゃないけど、元気な姿を見せようかなみたいな。

山岡: 「下駄屋」でバイトしていた頃に、家賃踏み倒しですか？

谷川: そうですね。で、静岡の親には全然顔見せてなかったから。

山岡: ずっと連絡してなかったんですか。

谷川: そうですね。一度、妹がアパートまで探しに来たりとか。

山岡: 家出娘状態ですか。よく続けられましたね、10年も。

谷川: 久しぶり帰ったら父親がいて、「元気やってるけど」って挨拶して帰ったら、その後に電話があって酔っ払っていろいろ変なこと言ってきた。だから冷たく返事したら、そのあとの春分の日に「父親が死んだ」って母親から電話があって……前日に飲みに行っって大声で歌ってたんだけど、朝起きて来なかったから見に行ったら死んじゃってた。妹が結婚して家を出てたから母親が1人になっちゃうので、じゃあ少しの間静岡でアルバイトして、また東京へ戻ろうかなと。

山岡: お母さんは仕事してなかった？

谷川: 父親の仕事を手伝ったんですよね、あと内職してた。

山岡: お母さんは苦労されたんですか？

谷川: そうですね。父親の死因は心臓肥大だったんですけど……前からアルコール依存の施設に出たり入ったりしてて、更生しようと思って真面目に警備員の仕事を始めたところだった。でも、昔の飲み友達と飲みに行っちゃって。母親が「あの人と一緒に飲みに行っちゃ駄目」って止めたんだけど。急に飲みすぎたんですね。肝臓も悪かったけど、心臓は特に。

北山: 大変だったんですね。

谷川: そうですね。父親が亡くなった後は、みんな肩の荷が下りたみたいなき感じだった。母親と妹と弟は、お葬式では泣いたけど、「死んでくれてまあよかった」って。わたしが静岡にいない時、すごい状態だったって聞いて、それに責任を感じちゃいけないんだけど、やっぱり毎年春分の時になると、不安定な感じになります。

北山: そうですね。

谷川: 結局4年間ぐらい静岡にいて、その後にこの「ジャミラ」っていう作品をやりました。

山岡: そのあと、なんですかね。東京の方に戻って来たんですか？

谷川: はい。戻ってきてからは、三鷹にある紀伊国屋のお菓子とパンとケーキを作る工場にアルバイトで入ることが出来て。

山岡: パンが好きですね。前はパンのお店で、この時はパン工場なんですかね。

谷川: とにかくセックス産業の他に、どういうところで働けるか分からなくて。でも体を動かして働く方がいいという気持ちがあって、それでパン屋さんで働いたんですよ。

山岡: はい。

谷川: それで東京に帰ってくる少し前、静岡で三島市の沖ヨガ道場っていう断食道場に行ったんですよ。本で見て昔から一度は行ってみたいと思っていて。そこで永山亜紀子さんに会って、永山さんを通じて及川さんのアルト一館に行ったんです。及川さんは「ミルテの丘」っていうのを三鷹でやっていて、バレエのパーレッスンもあれば、太極拳も気功もやっています。動きをソロで即興でやるレッスンがあって、自分はこういうふうにやってみたかった！っていう気がした。

山岡: 及川さんのところに行ってダンス、舞踏、パフォーマンスを、体系的に学んだということですか？

谷川: イトー・タリーさんも行ってたっていうから、及川さんがパフォーマンスのための体作りをやっていたんだと思います。土方さんとか大野慶人さんとかも習いに来てた。わたしはちょっと精神的におかしな人って感じだったんだけど、及川さんはそういう人に注目してたような所があった。昔から、頭がおかしいんじゃないかって見られるところがあって、だからパフォーマンスで自分を表現したいと思ったのかもしれない。感情や衝動的なものを中心に生きて、自分を客観的に見れてなかったのので、日記を書いて自分の気持ちを整理しました。パン工場で働きながら及川さんのレッスンに行って、日記を書いて、パフォーマンスで読んでって感じ。

北山: 日記は何歳くらいからですか? 今もつけてるんですか?

谷川: 今はつけてはないんですけど、日記は小学校の時からつけてたかな。妹はそれを読んで、そんな思いでいたんだ... みたいなことを後で言ってたけれど。あんまり人に言えない自分の苦しい気持ちとかを書いてた。

北山: そうですか。

谷川: 1998年のテレプシコールの時には、《泥の子供 ジャミラ》をやって、パン工場の時の日記を読んで、父親が死ぬ前に歌ってたらしい、村田英雄の「王将」を歌ったんですけど。

山岡: 新企画で、しかも自主企画でソロイベントなんですかね?

谷川: そうですね、一応テレプシコールで、自分の知り合いとかが観にきた。

山岡: すごいですね!

谷川: 続けてったらよかったけど、NIPAF(日本国際パフォーマンス・アートフェスティバル Nippon International Performance Art Festivalの通称、ニパフと表記することもある)に誘われちゃって、結局外国も行きたかったから(笑)

山岡: 99年のNIPAFの「アジア・パフォーマンス・アート連続展」から始まって...

谷川: そうですね、98年からずっとパン工場のシリーズの感じを、少しずつアレンジして。

山岡: なるほど。

5. 《夢のパン工場》

山岡: WAN(ウィメンズアートネットワーク)の時の《夢のパン工場》という作品は、どんな作品なんですか?

谷川: それはね、2000年に紀伊国屋を結婚するから辞めます、って言って...

山岡: 紀伊国屋のパン屋ですか?

谷川: はい、三鷹の。初めて4年間も続けて働いたんですよ。やっぱりちょっと変わってるって、まわりから言われたりはしたんだけど、仕事は真面目に続けてすごく楽しかった。だけど、途中から必要なこと以外話さないようにしたら、向かい合って作業してる人の心の中の声が聞こえ出しちゃって。

山岡: 心の中の声が聞こえ出した！

谷川: 長くは続かなかったけど、声が聞こえちゃって。でもその中で嫌われてるわけでもないんだな、って分かったりもしたんだけど。

山岡: はい。



《夢のパン工場》2000年

第五回 NIPAF 「アジア・パフォーマンス・アート連続展」

谷川: 辞める時、最後にパン工場の人たち一人一人と「記念写真を撮らせてください！」って言って、撮らせてもらった。WANの時はその写真をスライドで上映して、会場にいる人にも同じようにパン工場の時かぶってた帽子と白いエプロンをつけてもらって、並んで写真を撮ってもらおうパフォーマンスをしました。

山岡: なんか変な言い方だけど、普通の顔して笑ってますね。

北山: うん。楽しそう。

谷川: これは長野の公園で。2000年のNIPAFの「アジア・パフォーマンス・アート連続展」ですね。

北山: この格好も、かわいい。

山岡: この《夢のパン工場》のシリーズって、まりさんの作品の中で結構大事ですか？

谷川: そうですね。

山岡: なぜ「夢の」って付けたんですか？

谷川: WANの時に文章に書いたんだけど。「わたしは、パフォーマーです」みたいに、本当は一日中身体訓練とか研究とかやっていたじゃないですか？ だけど、やっぱり働かなきゃいけない。

北山: そうですね。

谷川: 劇場、スペースとかで見せるのもパフォーマンスだけど、日常のお金を稼ぐためにやってる動きもパフォーマンスって考えたっていうのがあって、それで「これはパン工場でやってるパフォーマンスです」、みたいに考えたんです。

北山: それで「夢のパン工場」の名前につながるんですね。

山岡: 4年続けて、嫌な思いはほとんどなく、寿退社。みんな祝福してくれますもんね。

谷川: 自分の暗い内面をそのまま表現するのが舞踏的な手法だとしたら、この作品はちょっと現代美術みたいな感じになれたのかなって思います。NIPAFに参加して色々な人のパフォーマンスを見て、そういうふうにしようと思った。

北山: ちょっと気になったんですけど、NIPAFは第3回目から参加なんですか？ 最初の方のNIPAFには参加されてなかったんですか？

谷川: 静岡に戻ってて。

北山: 戻ってたからということなんでしょうか？

山岡: それもあると思うけど、荒井さんによると霜田さんのスタンスとしてね、80年代と一緒にやってた人は呼びたくないと思っていたらしいって言ってたよ。

谷川: 最初は、わりと美術系の人を呼んでましたね。

北山: 80年代と一緒にやってた人は、あまり美術系っぽくないってということですか？

山岡: ちょっとアングラっぽいから。NIPAFは始め何年かは国際交流フォーラムとか、メジャーな場所でやりましたね。で、90年代の最後になって少しずつ前の仲間を呼び始めた。場所も「キッド・アイラック・ホール」に移ったし、メジャー路線じゃなくなったのかな。サエグサさんもこの時ぐらいから参加してましたか？

谷川: 参加したのは、その次の年ぐらい。よく荒井さんと一緒に「現場の力」に参加してた。

山岡: 荒井さんが本を食べてるやつかな? 2人でやってるって、意外と見たことがないような。

谷川: 2人でやってた。本を食べてたような気がします。

山岡: まりさんは、99年もガンガンやってますね。2ヶ月に1回ぐらいのペースで。

谷川: そうですね。けっこう頑張った。

山岡: 丸木美術館での《丸木俊さんの思い出》は、なんか思い出深いですか?

谷川: 丸木美術館は20歳ぐらいの時に行ったことはあって、丸木位里さん、俊さんのお話聞きに行ったことがあった。この時は「劇団カノコ」っていう...誰だっけな?

山岡: 山田浩子さんとデュオって書いてあるけど。

谷川: そうそう、山田浩子さんは及川さんのところでずっと一緒に稽古してたんです。ダンスの人です。その時、なにか一緒にパフォーマンスしたんだ。

山岡: これは誰の企画ですか?

谷川: これは誰ってわけじゃなくて、丸木美術館の展覧会の中の一つで。黒田オサムさんも行ってたみたいだけど。

山岡: この頃の丸木美術館って、反戦美術展みたいなのをよくやりましたよね。

谷川: そうでしたね。

7. NIPAF海外公演、「W P A O」への参加

山岡: 《まりの傷だらけの人生》って、ナルシスティックなタイトル。これは海外ですか?

谷川: 海外でやった最初のパフォーマンスはそういう名前をつけてるんですよね。

山岡: 99年10月が、最初の海外ですか? ズビグニエフ・バルペホフスキ (Zbigniew Warpechowski) の企画ですね。ポーランドのサンドミエシュ (Sandomierz)。

谷川: そうですね、それで初めて参加して。

山岡: ズビグニエフっていうのはこの頃、NIPAFに来てたんですかね？

谷川: 来てましたよね。

山岡: ポーランドツアーは、NIPAFの人たちで行ったんですか？何人ぐらいで行ったんでしょうか？

谷川: それは霜田さんと黒田さんと川端満美子さんとサエグサさん、幅佳織さん。それが初めてのNIPAFの海外ツアー。

山岡: サンドミエシュってお城みたいなどころよね。

谷川: そうですね。3つの都市やりました。ルブリンでも、すごい素敵なギャラリーでね。クラコフはライブスペースみたいなどこ。アルチュール・タイバー (Artur Tajber)とか参加していました。同じ年の次の週に日本のノイズの秋田昌美さんの名前が英語でのってたから、その時代に日本人を結構呼んでたんじゃないかな。ちょうど民主化というか、開けてきたような感じだったと思うんですけど。

山岡: 《まりの傷だらけの人生》でのパフォーマンスでは、どんなことをしたんですか？

谷川: それは写真もあるんだけど、今思うとなんでこんなことやったんだろうって。浴衣を着て、それから裸になるみたいな。

山岡: これは！すごくない？！お尻？

谷川: それは、NIPAFに出て、すぐの頃。そういえば母が言っていたのですが、わたしは生まれた時に仮死状態で、逆さにされてお尻を叩かれて産声をあげたそうで、それをパフォーマンスの中でやってみたんだと思います。

北山: 霜田さんも、裸になるパフォーマンスをしますよね。

谷川: 川端満美子さんとかもどンドン、ね。だから、そういうのに触発されて裸になっちゃった(笑)。NIPAFでなんでこんなに裸になってんだろうと思って。裸でパフォーマンスをすることについては、固定観念を壊す良い面があるけれど、でも日常的には固定観念はそのままだから、アーティストの間でもハラスメントを感じる場面はありましたね。

山岡: そうですか.....

谷川: 今、改めて考えると、ゴムの皮膚を使ったターリさんのパフォーマンスは本質をついていると思う。

北山: まわりに新聞紙が散らばってるのもいいですね。新聞紙でなにかしたんですか？

谷川: その頃、新聞紙をちぎって置いておくっていうのが好きだったみたい。新聞紙は意外と絵になるっていうか、くしゃくしゃって置いとくと、なんか面白い感じがする。持ち運びに便利だから。NIPAFは移動が多いしすぐ片付けられる物でないと。

北山: そうですよ、すぐ撤収！みたいな。

谷川: そういえば、ガムテープを没収されたりしましたね、空港で。テロで使うから。

山岡: 手荷物に入れとくと没収されるってことですね。この前後に、《ヨッカナイ・ベナタン》っていう不思議なタイトルのパフォーマンスがありますね。

谷川: それは、「ヨッカナイ・ベナタン」っていうパン屋さんがあったんですよ。

北山: パン屋さんの名前なんですね。

山岡: それは、なんか健康に良いパン？

谷川: そんな感じで、ドイツの。

山岡: 日本もあったんですかそのお店？

谷川: そうです。「ヨッカライ」っていうのが。

山岡: 「ヨッカライ」からもじって。

谷川: そんな感じで、パン屋さんで働く子供の物語みたいな感じで作ったんですよ。

北山: ストーリーがあるんですか？

谷川: そうですね、パン屋さんで働くっていうことで頭に浮かんできたことを物語にしたんですけど。最初にジャカルタでやった時は、わりとダンスっぽい動きをやった気がします。

北山: どんなことをするんですか？

谷川: 会場の人と一緒にパン屋さんの帽子とかエプロンとかを付けてパンをこねて、並んで写真を撮るパフォーマンスをやりました。後半は、小麦粉じゃなくて紙粘土にしてるんですけどね。

山岡: 《夢のパン工場》も《ヨッカナイ・ベナタン》もパン屋の話なんですね。

谷川: そうですね。《ヨッカナイ・ベナタン》は、「WPAO(第1回ウィメンズパフォーマンスアート大阪)」(WAN(Women's Art Networkの略称)の企画)ではいかにもっていう名前にしてたけど、NIPAFで海外でやる時は、動きや展開がありました。前半は毛糸の帽子があって、それとつながってる黄色とか赤とかの毛糸を会場で投げて。

北山: その後どうなるんですか？

谷川: 投げて、毛糸の色を会場に動きとともに見せる。それで紙粘土をこねて、ウサギみたいなの作って、みたいな感じ。

北山: 毛糸は1つ1つ投げたんですか？

谷川: 2つぐらい、赤とか黄色とかだった。

山岡: パン工場を辞めてからもしばらくはパン工場の作品ですね。WANでは全部《夢のパン工場》をやったんですね？

谷川: そうですね。あまりにもやりすぎて。いつも同じことやらないでとか、アンケートに「これはひどい」みたいなことを書かれた(笑)。

山岡: ほんとう？でも全部見に来た人がいるってことだよ、逆に言うと。WANへの参加はどんな体験でした？

谷川: やっぱりNIPAFとは違って、もうちょっと自分の作品に取り組めたっていうか、「こういう場所で発表するならこういう形にしよう」ってやりやすかった。NIPAFだと次から次に人がやってくるから、その制限の中での自分のパフォーマンスって形にしていけるけど。

山岡: WANのテーマについては、どうですか？

谷川: フェミニズムっていうのを自分はどれくらい理解してたかわからないし、ある人には「お前はマジョリティーだ」って言われた。

北山: それはなんだろう、結婚してたからですか？

谷川: なんかモジモジしてたからね。

山岡: マイノリティじゃなきゃいけないってことですかね。

谷川: まあ、そういうフェミニストとして自分を貫いてる人から見ると、自分はすごく中途半端だなんていうふうに思うんだけど。

北山: 関谷泉さんも似た葛藤を話していますよね。

山岡: そうですね。わたしも WAN が出来る前の時期(1997年くらい)、イトー・タリーさんのイベントに観客として参加したんですよね。そのイベントのディスカッションの時間に「男が企画してるイベントに参加するのは居心地が悪い」ってイトー・タリーさんが言って。で、わたしは当時、まだ経験が少なかったので、「どういうところがですか？」とかってまっすぐに質問したら、隣に座ってる人に「あんた、ヘテロでしょ？」と言われて、こられました。

谷川: わたしも似た体験があったな。

山岡: そうですね。

谷川: 反日武装戦線の三菱重工爆破事件の拘留された人のお母さんたちを撮影した『母たち』っていう映画を観た人たちの会で「でも殺された人の気持ちっていうのは、どうなんでしょうね？」って聞いたら「それは愚問だ」みたいな雰囲気になったことがありましたね。そこを話すのが活動なんじゃないかなと、足りない頭で思ったんだけど。もちろん、わたしも死刑は本当に良くないと思っていて、獄中の人から「中でまた人生を思い返しました」っていうお手紙をもらったこともあります。反日ということから、自分はパフォーマンスの世界に入ることができたけど。

山岡: 考えさせられますね。反日ということ、まりさんはどう考えているんですか？

谷川: 中学高校時代の先生が日教組の人で中国に侵略戦争に行った映画を観せてくれたことや、反日的な思想を知ったことから、何かの気持ちを表現したいって方向に行った気はしています。パフォーマンスをやり始めた時は、運動とは関係なくやろうという気持ちだったんだけど、結局はそういう人たちのコミュニティでやってたのかもしれない。

山岡: 重要な話ですね。マジョリティーって言われたっていう違和感の話も。

谷川: わたしがイトー・タリーさんの企画の「越境する女たち21展」に参加できたのは、男性を入れないスタンスでいてくれたことと、同性愛者じゃなくても女性であれば参加させてくれたことが大きいですね。フェミニズムとかセクシャルマイノリティとしての女性っていうことをタリーさんが言ってくれてたのがすごく大きい。

山岡: 逆にいうと、男性が全然いなくてフェミニズムをテーマにしているコミュニティはちょっと居づらかった？

谷川: はい。男性がいると、居やすい部分もあると思うんですよね。

北山: はい。

谷川: それでも、WAN や「WPAO」は1人1人のことを大事にしてくれてる感じは、大阪でも東京でもあったと思いますね。なんでもやっていいっていう環境を主催の人が設定してくれて、その中で作品を練れた。特に中西美穂さんのあたたかさが励みになりました。そういう助けもあって、自分はやってこれたって感じます。下川真由美さんという人がプロデュースしてくれたことも大きかった。

山岡: プロデュースしてくれるってことは、企画してくれたということですか？

谷川: 場所と関係性を持ってくれたり、お知らせをしてくれたりとか。京都の場所とかも見つけてくれて、お金持ちの友だちの家に泊まらせてくれたりとか。

北山: 下川真由美さんって企画をする方なんですか？

谷川: そうですね。「田島パフォーマンスフェスティバル」とか福島之星野さんの企画で、よくお見かけしてたんです。

北山: パフォーマンスをやる方なんですか？

谷川: パフォーマンスはやってないです。見るのと文章書くのが好きな方でしたね。

山岡：つまり、そういった環境で成長してきたということですね。

谷川：そうです。

山岡：あと「公民館運動」のように、みんなで集まって、わりと自由にやるっていうのも良い機会だった？

谷川：そうですね。まだパフォーマンスをやって間もない頃に、たくさん実験させてもらいました。

8. 2000年代の作品

山岡：まりさんの2000年代の活動ってどうだったんですか？

谷川：NIPAFの「アジア・パフォーマンス・アート連続展」でいろんな交流展に行って、けっこうパフォーマンスしてました。WANの中西美穂さんが京都の「ギャラリーそわか」で、「アジアのパフォーマンスフェスティバルに参加して」っていうアーティストトークの機会を作ってくれて、その時はアジアのことを話しました。

山岡：さっきのポーランドの企画も含めて、海外のフェスティバルに参加すると外国のアーティストたちにも会いますよね。どんな刺激とか受けましたか？

谷川：インドネシアで初めてパフォーマンスした会場の名前は、「ウタンカユシアター」という場所でした。ジャカルタでは、外にレストランがある昔詩人が朗読をしていた場所と、バンドンのアラフマヤーニ(Arahmaiani)が教えてる場所とか、イワン・ビジョノ(Iwan Vijono)が運営しているスペースを見に行ったりしましたね。イワン・ビジョノ(Iwan Vijono)は、廃校になった大学で暮らして作品を作っていて面白かった。でも、なんか面白いなあ、で終わっちゃった。

山岡：そうかもしれない。NIPAFで一緒に行っちゃうと、直接自分で交渉して色んな人に会いに行くって形じゃなくて、ツアーになっちゃうからね。

北山：NIPAFが来るのに合わせて企画してるから、向こうの企画に参加っていう感じではないかもしれませんね。

谷川：見るものが全部初めてのものばかりだったから、面白かったな。

山岡：移住したいと思わなかったんですか？

谷川: ミャンマーはすごい良いなと思ったな。ミャンマーは軍事政権で弾圧されてて、社会主義だから伝統的な芸術以外はやっちゃいけないって感じだったけど、みんな平和に生活してる感じがした。ベトナムも。パフォーマンスイベントは、ギャラリーに来る人を制限して閉め切って、その中でやらしてもらった。

北山: それは「New Zero Art Space」ですか？

谷川: そう、エイコー(Aye Ko)のスペース。アウンミン(Aung Myint)とかいました。レストランの所でパーティをやっているという体にして、パフォーマンスイベントをした。

山岡: まりさんの、代表作ってどれですか？《夢のパン工場》と《ジャミラ》？

谷川: はい。あと下川さんが企画してくれた《ナタナエル》っていうやつが。

山岡: 《ナタナエル》っていうのは？

谷川: アンドレ・ジットの『地の糧』っていう本の中に出でくる人の名前。その本の中にナタナエルっていう人に向かって書いてる文章があって。

山岡: どんなパフォーマンスですか？93年ですよ。

谷川: 《ナタナエル》では、今日の最初の方で話しておじいちゃんの.....

山岡: 変なおじいさんから嫌な事をされたっていう経験のこと？

谷川: そう。その話をして、その次にうさぎのお面を被って、ジャンプする。ジャンプするのを間にはさみながら、動きや話をしていった。他には何かを身体に巻いたり、ギャーって言ったりしたかな(笑)。

山岡: 他に出演者はいたんですか？

谷川: この時は、2組だったんですよ。フルカワトシマサさんと山下残さんのユニットと、わたし。

山岡: まりさんはソロだったんですか？

谷川: そうですね、ソロとして発表しました。

北山: このDMにうさぎ描いてあるってことは、最初からピョンピョン跳ねるのを決めてたのでしょうか？

谷川: そうですね、それは事前に考えてからやりました。

山岡: フルカワトシマサさんってどんな人ですか？

谷川: フルカワトシマサさんはパフォーマンス中に、ビニール袋で息が詰まって亡くなっちゃった人ですよ、2、3年前。

山岡: パフォーマンス中に死んじゃったってこと？

北山: ニュースにも出てましたよね。パフォーマンスでビニールを顔に被って、それがくっついちゃって倒れて、観客はそれもパフォーマンスの一部かと思って観てただけで、様子おかしい、息してない！ってなっちゃった。

山岡: そうですね、.....知らなかった。フルカワさんは舞踏っぽい感じですか？

谷川: いや、パフォーマンスですよ、何をやってるか分からない感じ。石を積んだりとかを淡々とやる人だった。ゲノム遺伝子組み換えのことを問題にしている、そういうことを書いてたのを見た記憶がありますね。すごく良い人だったんですよ。

山岡: そうですね、.....残念でしたね。

北山: まりさんは、自分の生活の身のまわりのものを使ってパフォーマンスをする感じですか？

谷川: そうですね、やっぱり一番使いやすい。フリーマーケットとかバザーが好きでよく行って、そこでちょっと変わった物や服を買いましたね。たまたまもらった物を使うこともあったし、その時々で必要なものを探したりして。

北山: その時に気になった物をパフォーマンスで使ってみよう、ということですか？

谷川: わりと、台所で使う果物とか、あとシッカロールっていうパウダーをよく使っていましたね。面白いからでもあるんだけど、シュタイナーの本の中に、絵を描いて最後に白い色をバツて使うのは「光」という意味があるんだって書いてあって。

北山: へえー！

谷川: それをやりたいな、っていうのがあったんですよね。なので最後に、白いパウダー使ったり、照明をパツって明るくしてもらったり。特に《ナタナエル》で反原発のメッセージを込めようと思ってやった時には、白い布に最後に白い光をバーって一番強くあてて欲しい、と伝えて。それが原爆の光っていったらなんか怖いけど。

北山: ピカッって一瞬光る怖さとか。

谷川: でもいい意味の光もあるんじゃないかなとか、両方の考えは持ってました。

北山: それは、さっき仰ってましたが、気持ちが落ち込みがちだからこそ光を求める、というのがあったんでしょうか？

谷川: たぶん、そういうことなんだろうと思います。

山岡: 2000年あたりの作品にある《兎庵昼曲》の、兎っていうのは思い入れがある動物ですか？

谷川: 自分が兎年だから。

山岡: 大人しい動物っていう。

谷川: そうですね、自分の内向性みたいなとか。

山岡: 《ちょっと買い物に行って来ます》ってタイトルは、妙に明るいんですが.....

谷川: たまたまそういう題名にしてみたのかな？全然意味が分からないです、自分でも(笑)。

北山: タイトル素敵ですよ。

谷川: ありがとうございます。

山岡: パフォーマンスをはじめて、10年20年30年目になってくると、どう変化がありましたか？自分のやりたい方向が見えてくる感じですか？それともなんか違うことをしたり？

谷川: 最初の頃は即興が多くて、企画に対して自分の世界をのせて行くような感じでした。最初は音楽の中で即興をやってました。でも、NIPAFって音楽はないし照明はそのままが多いから、その中で出来ることを考

えてましたね。いろんな人のパフォーマンスを見てると、その要素を取り入れたいなっちゃうっていうのはありました。

北山: ほかのアーティストのパフォーマンスを見て、「あれ、わたしも使ってみたい！ やってみたい！」とか。

谷川: そういう感じはあります。パフォーマンスの中で子供時代のことやパン工場での経験を、私小説的に展開していくうちに、いろいろ経験したかな。

山岡: まりさんは NIPAF に2000年から5年間参加してますけど、その日々はどんな感じでしたか？ ニパフはインターナショナルだけじゃなくてアジア連続展もあるし、ワークショップもある。

谷川: NIPAF が「キッド・アイラック・ホール」に移ってから、自分も参加するようになって、アジアの人たちと交流したり、ヨーロッパの戦争に負けて貧しい国の人たちと交流したりして、ある意味人が体験出来ないようなことを体験出来ました。必死に広報とか頑張ってた。

山岡: 広報は大変でしたか？

谷川: チラシを配りに行っても、霜田さんだけは嫌だって言われたり、まあ大変だった(笑)

山岡: パフォーマンスの経験はどうでしたか？

谷川: 韓国では路上とかパフォーマンススペースじゃないようなただ広い場所で、お客さんがいなくなっちゃたりとかありました(笑) そういう経験していくうちに、度胸はついたかな。あと、海外のアーティストたちと関わる中で、「パフォーマンスしてるのは、自分だけじゃない」という意識にもなれた。

山岡: いいですね。

谷川: でもニパフは「暗黒舞踏」って言われたりとかもあって。(笑) それはわたしのことかな、とか思ったり...

山岡: 暗い作品が多いってということ？

谷川: なにかを体に巻いて裸になってるとかを見たのかな。そういえば、ある日ニパフのお客さんから会場に電話がかかって来て、たまたま出たら「裸見れるんですか？」みたいに聞かれたりして(笑)。NIPAF の中で裸になっちゃう子って結構出てくるから。一体なんなんだろうって思ったけど。

北山: そうなのを狙ってイベントに行く人、結構いたって聞きますね。NIPAF だけじゃなくて、舞踏とかでも。

谷川: 舞踏もそうですね。

北山: 一定数そういうお客さんはいるって話はあるから、NIPAF だけじゃないってことですよね。

谷川: NIPAF には色んな参加者がいたからその中で丹羽くん(丹羽良徳)とかとも交流して、一緒にイベント(「アートは自由である」2005年)に出れたりとか、そういう道もだんだん開けていった。霜田さんのところで色んな人と付き合わせてもらったし、他の人が出来ない体験はさせてもらった。だけど、だんだん大変になって。

山岡: 大変になったっていうのは具体的に？

谷川: 経済的に。

山岡: 参加する費用が高いということですか？

谷川: それはありますね。あとはお客さん呼ぶのが大変ってのはありました。

山岡: カタログを買わなきゃいけないっていうのはあったんですか？

谷川: はい。アジアの人のために買うっていうか、そういう感じありましたね。お金払ってあたり前っていうようなところはあったかな。

山岡: そうですか。

谷川: でも自分のソロ公演を続けるとしたら、お金がすごくかかるから。他のアーティストのパフォーマンスも見れて海外の色んなところも行っていいなと思いました。海外では観光しちゃったっていうか、「～が美味しかった」って反省会で言ったら霜田さんに怒られた(笑)。

山岡: あと2003年に自主企画ソロパフォーマンス《密会》、2005年にグループ展、パフォーマンスイベント企画を大倉山記念館でやってるじゃないですか？大倉山記念館って大きな場所ですよね？

谷川: 80年代には大倉山記念館で、いろんな人がパフォーマンスしてたから。建物の外やギャラリーでもパフォーマンスしてましたね。ギャラリーの中庭は消防法の関係で本当は使っちゃいけないんだけど、そこを交渉をしないで使っちゃったりとか。

山岡: 表現したいことがあったということですよ。借りるのだけってお金掛かる……

谷川: それほどでもないですよ、ギャラリーだから4万円くらい。

山岡: 安いんだね。自分のモチベーションとして、公演しよう！っていうのは、なにか人に伝えたいとか、アーティストとしてありたいとかですか？

谷川: その頃はパフォーマンスだけじゃなくて、展示もしたいなって考えてた。

山岡: この時は展示もしたんですか？

谷川: はい。この大倉山記念公園の時はグループ展でした。この時、第2回 WPAO (2003年)の方にもソロパフォーマンスで参加していて、2つをセットにしたチラシを作ってた。

山岡: そうでしたか。

谷川: あと、のぎすみさんと高橋フミ子さんと三人でやったのもあるんですよ、大倉山記念館で。大倉山記念館は家と近いから、定期的にやりたいなって思ったけど、一回くらいで辞めちゃった。

9. 酵母、そして「アレキサンダー・テクニーク」

山岡: その後、酵母に目覚めますよね？そのあたりの話を聞きたいです。この時期にパン屋は辞めてるじゃない？

谷川: そうですね。安全な食品とかを箱に詰める宅配事業のアルバイトをしてました。

山岡: パンのお仕事してたのに繋がってるんだと思うんですけど、この時は酵母にハマってたじゃない？わたしが企画した「Timeless-based Action」(2006年)の時も酵母持ってきてたよね。

谷川: 果物を瓶に入れて発酵させるっていうのを本で見て、その本がすごくきれいだったんでそれを展示しようと思って。

山岡: 発酵とパフォーマンスをつなげてませんでしたっけ？

谷川: そうですね、そういう気持ちはあった。

山岡: 酵母の力でグーッと違った物に変化することが、パフォーマンスをしている時にハットなることと近い、みたいなこと？かな。

谷川: そんな気持ちがあったのかも。

山岡: トキアートスペースでの「GAZE」展(2006年)の時は、なにをしたっけ？

谷川: 自分で手書きのチラシ作った。《空からの涙》って言うタイトルにして。

山岡: ナプキンで服を作って、ダンスをしたんだっけ？

谷川: そう、思い出した。そのパフォーマンス、やりましたね！ビニール袋にいくつか穴をあけて、そこにナプキンにうさぎの絵を描いた物をこう、お客さんに渡して貼り付けてもらって(笑)

北山: うさぎが出て来るんですね。

山岡: ナプキンは、アラフマヤーニがナプキンのインスタレーションしてましたよね。

谷川: そうですね。

山岡: あと、ここには「最近のテーマは、ホルモン追悼から語る言葉を奪われた夢を分かち合う」って書いてある。この時は女性のテーマに、思い入れがあったんじゃないかしら。韓国のホルモンの家は、行ったんですか？

谷川: 行きましたね。

山岡: そのことと、《空からの涙》というタイトルは繋がってるのかしら？その時は現地に行って話聞いてきたから、思い入れがあったんですね。

谷川: 当時、そこまで考えてたんですね。忘れてました(笑)。その時はそう思ってたんですね。

北山: 酵母とか発酵の話、霜田さんもしてたなって思い出しました。

山岡: 今でもまた発酵は流行ってるけどね。2008年の「MORI 森～人という森と森が会う場所」っていうのは、まりちゃんの企画なんですよ。

北山: そうなんですか!

谷川: その頃は自分で企画してて。

山岡: わたしも参加させていただきまして。東京の信濃町、慶応大学医学部の前の横断歩道でみんなで寝るパフォーマンスをしました。あの時はゲリラっぽく。

谷川: ね!

山岡: この企画をした時のお気持ちは? 美学校の「ギグメンタ」ですよ。なんで「森」なんですか?

谷川: これは、1人の人の身体が1つの生態系だと考えて、「森が会う」と言いたかった気がします。生物学的に考えるとヘテロとLGBTの人は分かり合えないけど、共に歩いていくというか出会う場所があるという考えがあったんだと思います。

山岡: その後、お身体を壊されたんですよね。わたし知らなかった。あの後、あまり会わなかったもんね。震災があつたりして、世の中がガラッと変わったし。

谷川: 震災の前には、横浜の北仲アートスペースで「酵母カフェ」やらせて貰いましたね。井上玲さんっていう絵描きの人が出て、その人のところで。

山岡: あと、今、活躍してる「ポロニウム」の浅井裕介さん、白線で絵を描く人。彼のスペースでもイベントしましたよね。

谷川: そうそう。その時に酵母を果物瓶に入れて展示させてもらって。パンの小麦粉を練って発酵しなかった硬い物とかも展示させてもらった。あと何人か参加者も呼び掛けて、直方平ひろとくんとか作品展示してくれたのかな。

山岡: そうでしたね。

谷川: その時に、酵母の研究を一家でやってる「ウエダ家」さんっていう方が、他の展示の方の知り合いで、観に来たんです。話をしたら、わたしがその展示を考えた時に参考にした本がウエダ家さんが作った本だ

ったんですよね。1人1人、いろんな酵母でパンを作ったっていうのを集めた本だったんですが、展示をブログで紹介してくれて。いろんな人が「今日はこういう酵母作ってます」って投稿をしてくれた。

北山: へえー！

谷川: 酵母を使ったレシピを展示するような食のイベントもあって、それにも参加してた。アートとかパフォーマンスじゃないんだけど、面白くて。「食」については、考えましたね。「森」っていうイベントの時も、布で作った作品とお菓子を出しました。「ウエダ家」のお父さんはそこにも顔出してくれて。

山岡: なんとなく、記憶にあります。

谷川: 他にも代々木で食のイベントがあって、酵母で作ったお菓子を出品させてもらったり、レシピ本にも1、2個発表させてもらっている時期があって、酵母の講座をいろんな所でやりました。

北山: 楽しそう。

谷川: それで、Bank Art に「ウエダ家」のお父さんと息子さんを紹介したら池田さんが会ってくれて、まず Bank Art でイベントやって。

山岡: 食のイベント、Bank Art やってたもんね。

谷川: そう。Bank Art スクールに酵母をいろんな料理にいかすっていう講座を作ってもらって、それに夢中になっちゃった。「cobo」っていう、酵母で生活をデザインするという研究プロジェクトがあって、「cobo」はデザインもおしゃれだった。代官山のビルでパンショップをやるっていう話があって、そこで働きたいですって言って。でもそれも一年くらいだったかな。ウエダ家さんたちとスポンサーの意見が合わなくなっちゃって。初めて自分が職業として続けたいと思ったんだけど……

山岡: うーん。

谷川: 酵母を使った講座をこれからもやって行く道もあったんだけど、またそれを転機に別の事をやりたい、と思って。身体のことを勉強してみたいなって。

山岡: どんな勉強したんですか？

谷川: 最初はリフレクソロジーかな。足とか手のマッサージ。整体院で働きながら、身体のことをもっと勉強しようかなって。

山岡: 今も整体院で仕事してるんですか？

谷川: そうですね。家に近いところで雇ってもらって。週4日くらい。

山岡: 結構、大変そうですね。

谷川: 整体院で働き出した頃は技術を身に付けながら、朝10時から終電近くまで働く感じだったから、それに集中して他のことは休止って考えてました。

山岡: 興味があるし、仕事にもなって。

谷川: そうですね。それで、「MORI 森」の展示会の時に、わたしのワークショップを見に来てくれた人が、神田の GAIA っていう自然食品の野菜の店で働いてるってことで行ってみたら、八百屋の野菜を置いてある前に、ちっちゃい本棚があったの。本棚が置いてあるところが、夕方だったからライトで照らされてたんですよ。そこに『アレクサンダーと私ー〈アレクサンダー・テクニーク〉への道(からだの冒険 こころの冒険)』って本があって、それを買ったんです。アレクサンダーに直接習った人の話が私小説風に書かれてた。その人はちょっとした足首の障害があったんだけど、アレクサンダーをやる内にだんだん体の調和がとれてきて、普通に歩けるようになった、っていう内容の本。読みやすかった。

山岡: 偶然本を見つけたんですね。

谷川: はい。わたしは身体の使い方があまりよくなかったから、勉強しました。表現をしてる人でアレクサンダーテクニークを勉強してる人は多くて、楽器の演奏してる人とか、ダンサー、演劇の人もいたかな。思ってることと体の動きは分けられないっていう考えがあって、すごく面白い。

山岡: 面白そう。

谷川: 震災のあった年の夏にワークショップに参加して。それから勉強してるから、10年くらい。

山岡: その頃ですか。

谷川: 震災があった年は、ちょうど整体院で働き始めて半年くらいで、整体院の中がすごい揺れた。震災後は、福島の子津松市の被災地に整体院のスタッフでマッサージしに行きました。避難所の体育館だったかな。原発も壊れちゃったね。

山岡: あれほど原発反対運動してた、まりさんだもんね。どんな気持ちでした？やっぱり来たかみたいなき感じですか？

谷川: そうですね。絶対に安全じゃないと思ってたから。そうなっちゃってから騒ぐのって、どうなのかなっていう風に思っちゃった。

山岡: 前から活動してた人たちがいっぱいいるのにね。ああいうことがあってやっと気が付いたって人はいただろうと、前から知ってる人は違うよね。

谷川: 震災後に石川雷太さんが反原発の運動にも参加してたから、すごいなと思ったけどね。人がいなくなった所で、犬とか動物たちがお互いに食べ合ってしまったりとか、そういうことを石川さん展示で書いてた。土湯も被災したみたいだったな。

山岡: そうですか。

谷川: その時気持ちとしては、ただ自分は自分の仕事をしていくしかないって感じで。東北の人たち応援キャンペーンで、整体院が割引だった。仕事しながら色々考えました。でも、その時は何を表現したらいいのか全然わからなかった。表現からは、ちょっと距離を置いてたから。

山岡: 今はアレクサンダーのワークショップもしてるんですか？

谷川: はい。場所は、石川町の「カドベヤ」っていうところで、寿町が近いんですけど、シェアスペースっていうか居場所みたいな場所で、慶応大学の横山千晶先生が主催してるんですけど。(カドベヤウェブサイト <https://y-artsite.org/projects/2970/>)

山岡: どんな経緯でやることになったんですか？

谷川: アレクサンダーの学校に行ってたので、その課題の一環でワークショップをやるっていうのがあって、場所を探してた時に、サエグサさんが「黒沢美香さんが行ってるところでは？」って薦めてくれたんです。

北山: おお。

谷川: 行ってみたら寿町に近い場所で、おもしろい常連のおじさんがいて、「ぼくは、歌をうたってるんだ」って話しかけてくれた。「国鉄をクビ切られた後に自殺しようと思ってたら、教会の人に助けられてギターをもらって、それから歌をうたってるんだ」って言って。たぶん、さなぎ(NPO法人さなぎ達)から来てる人、もう亡くなっちゃったんだけど。それで、「ここ、おもしろいな」と思って、ワークショップやらせてもらいました。毎週火

曜日の夜に続けて。そこでは、黒沢美香さんもストレッチのワークショップしてました。黒沢美香さんと直接お話ししたりするようになったのは、「カドベヤ」に行ってからでしたね。

山岡: 黒沢さんは、もう亡くなられて7年ぐらい経つんですかね？ 2016年だから。どのくらいの頻度で、ワークショップしてるの？

谷川: そうですね、たまにですね。「カドベヤ」も、慶応大学が助成してる場所なんで、わりとコロナに対して厳しい。人を呼ばないでとか、こういう時は閉めます、みたいな。今は、「ビッグイシュー」を配ってるおじさんが、毎回来てるみたい。寿町の人も二人くらい来てる。

山岡: 段々終盤に近づいてきましたが、80年代、90年代、2000年代、積極的にパフォーマンスをやっていた30年近くのことを振り返って、どういう風に思っていますか？

谷川: 今回、いろんなものを押し入れからひっぱり出してきて、あらためてすごい頑張ってたなと思う。

山岡: このインタビューを機に、色々思い出しましたか？ まりさんは、どんどん前に進んでくみたいだね。だから、前はあぁだったのにとか、そんなことは考えないのかな。

谷川: いや、下川さんの企画してくれた時に手紙の交換とかもしてるんだけど、わたしは全然常識がなくて、実務能力もないし、書いてるものを読んでも知能が低いんじゃないかなって思います。人にもずっとそう言われてきてたし、仕事も身に付けるまでにすごく時間がかかるし。身に付いた頃に辞めて、また違う難しいものに挑戦するってところがあって。

山岡: はい。

谷川: 最近ではコロナが起きて、考えが昔とは変わってきた感じがあります。反日とか左翼運動とかが人を自虐的にさせるんじゃないかなって思ってきていて……

山岡: そうですか。

谷川: 『地球の歩き方』では、反日って考えがアジアの国の人の中であるって書かれてるんだけど、実際アジアに行ってみると「日本の人に良くしてもらった」と聞くことが多かったなって。韓国の「仮面フェスティバル」で、パフォーマンスさせてもらった時も、そこの支配人の人に、「私も谷川って言うんです。日本にいたことがあるんです」って言われたりとか。インドネシアに行った時も、日本人をすごく歓迎してくれたりとか、どこの国もそういう雰囲気があったと思う。反日ストリートとかジャカルタにはあったし、時々「味の素」問題のことをいわれる時もあるんだけど。

北山: そうですか。

谷川: 台湾に行った時も、日本人を歓迎してくれた。霜田さんを尊敬してるのかもしれないけど。自分は日本人で左翼的な活動を見てきて、「日本が戦争して、他の国を傷つけた、今は経済的に他の国を苦しめてる」ってことばかりを言われてきたけど、じゃあ日本はアメリカに何をされたのかってこともあるし。

北山: はい。

谷川: 今はコロナで、みんながバラバラにされて家族の繋がりも崩れていって、それでいいのかなって。なんでマスクしなくちゃいけないんだろうとか、本当に自粛しなきゃいけないかったんだろうかっていうことを、左翼運動の人たちは主張するのかっていうと、そうでもないし。

山岡: 左翼運動の人はマスクのことを言いそうで、言わないってこと？

谷川: そうですね。左翼の人っていう言い方は変だけど。メディアが統制されて、みんなが外に出られない状況が作られてることに対して、なぜ声をあげないのかなって。

山岡: なるほど。ちょっと作品の話に戻しますね。気に入ってる作品は《ジャミラ》と《ナタナエル》、あとは《夢のパン工房》ですか？

谷川: 「借景計画」のときも気に入ってます。目がおかしくなった小さい頃の自分の写真を、使ったパフォーマンス。

山岡: あれ、いいですよ。あのパフォーマンスは、あの時にしかしてない？

谷川: そうですね。ああいう場所で一緒に歩くっていうのも、すごくシンプルで。

山岡: タイトルは何でしたっけ？

谷川: あれは《私と一緒に歩いてください。》っていう。

山岡: いいタイトルですね。それでは、このあたりで終わりにしようかなと思います。今日は長い時間、ありがとうございました。